



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

二八  
門流卷  
4200

雄山先生著述

關流

精要算大法

平安書林

水玉堂藏

印

精要算法序

藤田定次貞字子證者

性穎悟而好數學精絕

父留未羽林侯之臣也

屬者著算法一書寫

講義

序

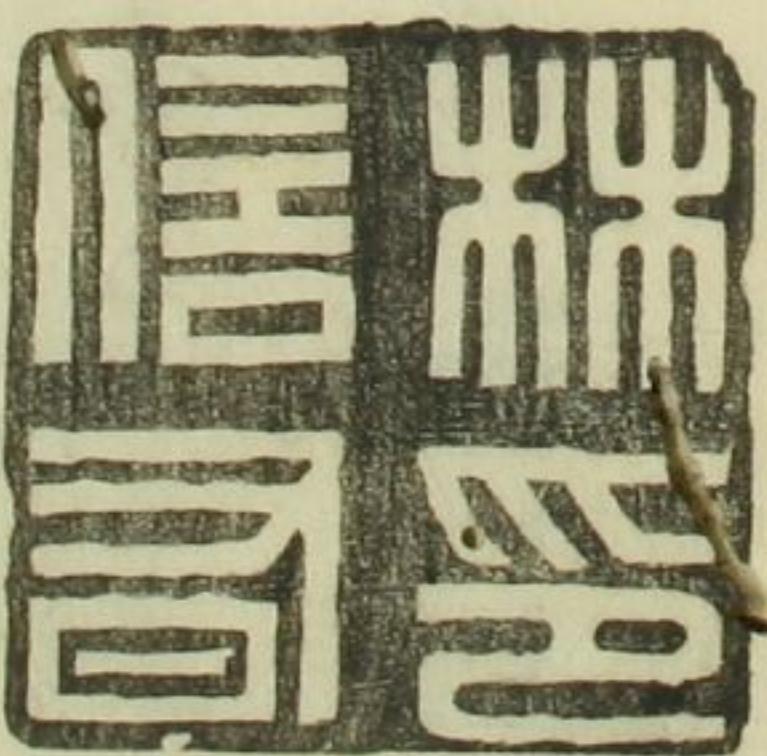
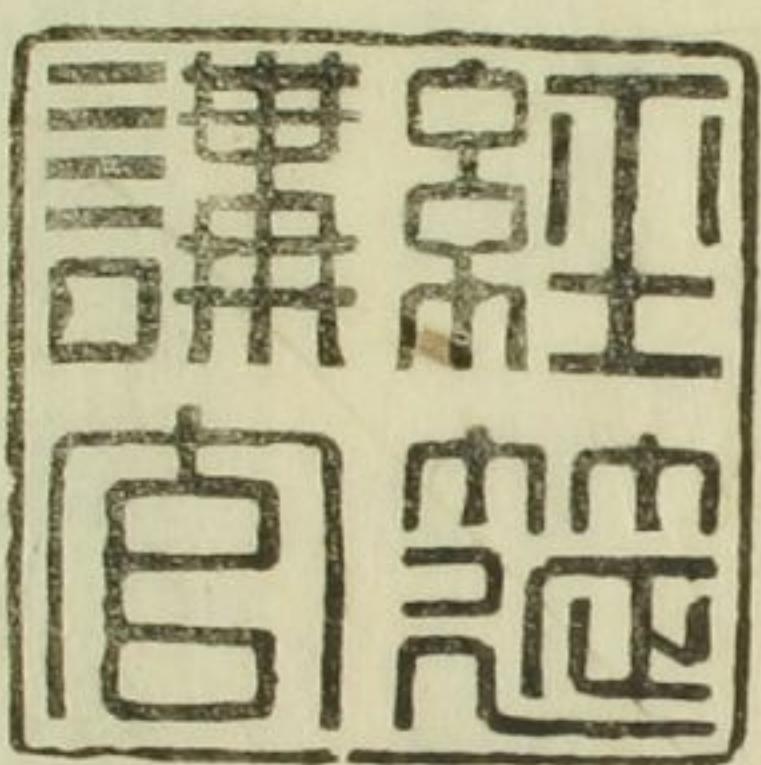
侯雅好數學。覽所著書。  
稱歎之賜名精要算法。  
請序於余。因子謹受  
業於山路子。以此出仕于  
侯焉山路氏之子廷義。  
嘗與余交善。廷義沒  
而不復聞其餘論也。  
久矣。子謹所著一出而  
人皆知山路子之門有  
人哉。余雖不知數學也。

侯之精絕于數世俱承  
知而侯之家選衆而擢  
子證於山路子之門子  
證以高第優仕得其  
君今之所著書觀之  
則其術之精可知但  
其書之為精其之道  
者自有論定焉爾余因  
爲之序而有感于迂  
羨哉若夫裨益于學

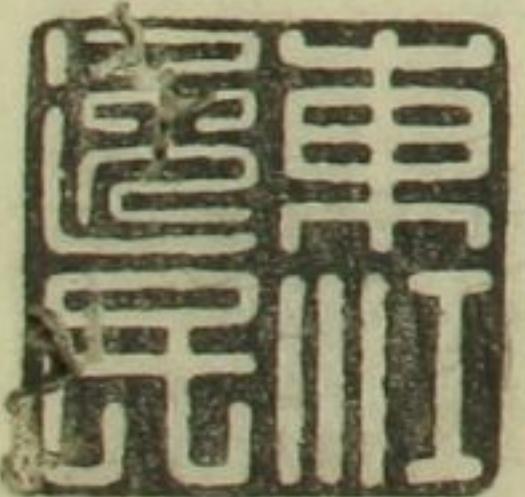
者與為世之有用則未  
遑具論也

安永庚子孟夏

經筵講官林信有撰



東江源鱗書



精要算法序

先王教民以六藝而數有九章  
之法也上自天地陰陽日月星  
辰造化之工下至井田經界律  
度量衡賦役之制舟車所至人  
力所通天之所覆地之所載華

夏蠻貊無不依焉而以臯似口  
似耳似枅似圈似臼似洼者似  
汚者長者短者廣者狹者無不  
由此以明也實是經世治國之  
用不可一日無者也藤田君之  
資天質頗敏以數鳴世自其揮  
褐於我藩麾諸生建旗鼓名矣  
而其所著之書三編欲壽諸棗  
梓以施同志謹請我  
公之名之  
烏蓋  
公嘉其志乃賜名曰精要算法

公亦好數於其妙也。一世已稱  
歎之則不啻慰譽之興。又此書  
精而要不置喙可知已。顧以書  
專欲便於學者故近借商賈貨  
買之言以立術具味之士。矯而  
充之則天地之大也。萬形之不  
同也無不微而盡者至其嘗鑄  
肉以識鎧中之味則固在讀者  
云。

安永八年己亥九月

久留米田中一貫夫撰

田中

貫

精要算法自叙

蓋數也清濁上下ニ分レテヨリ一ニヲ生レ二三ヲ生レ三萬物ヲ生レテ天地ノ間自然ニメ而此有ル者也數已ニ此有リ即千屈指而カソフル此亦濫觴トセん乎然ラハ敷策以カソフルモノ何レノ世ニカ夫レ此十カランヤ三皇五帝氏ハ遼タリ今聊此ヲ置ク三代ヨリ歴象日月星辰經營原濕封疆考定度量權衡其コレヲ弃テ何ヲ以テカ是ヲノ違ハサラレメンヤ故ニ先王平治天下國家ノ道ヲ立テ曰禮樂射御書數十其大ニ益

天下國家モノ以テ知ルヘキノミ而春秋ノ時曾  
亥有二首六身ノコト聞テ謂ラリ晋多大未可携  
也ト是筭數ヲ以テ國ノ重キヲ十ス可見哉豈唯  
會計ノ益アルノミ十ランヤ而メ秦漢以後以筭  
數名世洛下生カ如キモノ不可勝記也彼皆給天  
下國家之用モノ不尠ル其書書ニツイテ見而  
可知也抑我

東方三善氏始テ入大學寮ヨリ世世妙選其人登  
用其職以我天下國家ニ無益ハ我

先王何幣銓曹之吏何費平安之米ヤ然ルヲ近世  
是ヲ小吏賈人之為トスルモノハ是ヲ不知又メ  
也然ルヲ中古以來寥寥トメ其人モノ勝國  
ヨリ以徃諸侯割據干戈相加海内麻ノ如ク亂ル  
ルモノ數百有餘年時我

東方ノ文粉地ヲ拂テ盡リ筭數之道モ此ト凡ニ  
塵土ナル力而慶長之年海内歸一裏干戈鬯弓  
矢戰陳之氣消亡則宣布文教盛德遠及海隅百有  
餘年終ニ胞胎其光澤テ我關夫子孝和爰ニ生ル  
夫子ハ天授之才命世之器六歲ノ時人之會ノ敷  
筭スルモノラ見テ曰某ハ失第一策某ハ失第二

策ト蔡文姬力絶弦ヲ指力如リ人人愕然ト仰  
其面喟然トソ賞歎之以テ此ヲ奇異トス即長  
ニ及テ無師ノ筭數ノ奥妙此ヲ極ムルモノハ  
古人ノ所<sup>元</sup>謂雖<sup>元</sup>文王豪傑猶興ト云モノ其夫子  
ノ謂ヒ力又旁ラ學天官曆日盡ノ知其大義自中  
歲至白首焦神極思演段諸約前範管招差及角術圓  
法弧背立圓ノ術肇造之又筭題ニ逢フテ千化萬  
變自在フ十スヘキ者古人未發天地ノ間ニ松スル所夫  
子初テ悉ク發之卒ニ以テ輯錄之分門聚類テ數  
百卷ノ書ト十レ以テ後進ノ由路ト十スコニ  
ヨツテ我

東方言數者本之關夫子夫子授之荒木子村英建  
部子賢弘荒木子ハ授之松永子良弼建部子ハ授  
之中根子元珪而メ關夫子ノ書其雜記十ルモノ  
夫子與荒木子未遑授讌メ而止モノ松永子盡ク  
授讌之略加已意關夫子ノ書以テ大ニ成ル又久  
留島子義太未知數ノ時始テ筭書一二篇ヲ取テ  
一誦ソ悉ク知其義能言筭數之壺奥即徒衆又盛  
ニノ由是數有入留島學我先師山路先生主住始

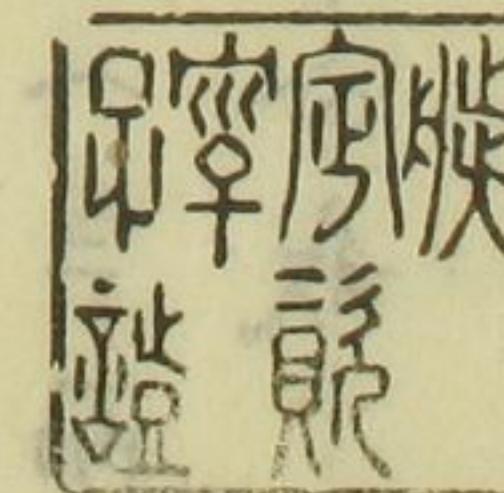
受業中根子後師事久留島子最後弟子松永子先生沈審穎悟且資性篤實十力即三君子悉ノ授帳中之秘遺ストナレト云其人久留島子實ニ仙才ト云トイヘ氏其性不羈其書甚少於是乎一家ヲ立ツヘカラズ先生以其緒言妙語合關夫子之學用授門人稱天下大師徒衆尤盛ナリ然レ氏先生謙遜退讓之質常曰著述上木スルモノ關夫子及五君子其高足弟子ノ他ハ不可也奈何トナレハ近世所上木算書見之杜撰妄誕不可勝道此不獨自取笑賊夫人之子也ト故自署スルトヨロノ書

トイヘ氏以テ此ヲ公ニセズ然レ氏我定資從先生學フノ久キ先生自關夫子三傳得之不可傳他之秘書悉授之及久留島子ノ奧秘ヲサヘニ而メ定資以為關夫子起テヨリ百有餘年于今我東方ノ算數一變メ道ニ至ルトイヘ氏天下ノ廣莫ナル數ハ先王六藝ノ一ニ置クモノニメ小吏賈人ハ為ト讐ルモノ不レクヤ定資關夫子ノ道ヲ擴メテ彼廣莫ノトコロニ克テ知之モノラノ多カラレメ以テ先生山高海深ノ恩ニ報セント則編書數卷公之天下其不知者始見テ此ヲ覆醬ト

セントスルモ漸ク以テ知之為我ニ終ニ左祖セ  
シノ必ス然テンカ此關夫子ヨリ我四傳ノ得  
ノ道ナレハ也

安永八年己亥初秋

米府筭學士 雄山 藤田定資子證甫識



凡例

一今ノ算數ニ用ノ用アリ無用ノ用アリ無用ノ無用  
アリ用ノ用ハ貿買貰貸斗斛丈尺城郭天官時日其  
他人事ニ益アルモノ總テ是ナリ故ニ此書上中巻  
ハ人ノ志モ界シト思ヘ几貿買貰貸ノ類日用ノ急  
ナル諸算書ニ見ヘサル我發明セルノ術載之關家  
ノ禁秘盡ク此術中ニ見ス無用ノ用ハ題術及異形  
ノ適等無極ノ術ノ類是ナリ此レ人事ノ急ニアラ  
スト錐トモ講習入レハ有用ノ佐助トナル譬へ小  
裘褐疏食茅室人以生クヘタメ袞冕鼎食城郭ハ其

佐助ニメナクシハアルヘカラサルカ如シ故ニ此書下巻ハ題術ノ初學ニ便ナルモノ其術文ノ煩去リ簡ニ歸シテ載之其間異形ノ適等無極ノ術ヲ具ス又大極ハ算數ノ本源ナルヤ上中下巻ノ術中ニ具ス無用ノ無用ハ近時ノ算書ヲ見ルニ題中ニ點線相混シ平立相入ル是レ數ニ迷テ理ニ闇ク實ヲ弃テ虛ニ走リ貿買貲貸ノ類ノ中ニ於テ算ニ達タル者ノ首ヲ疾シムルモノアルヲ知スメ甚界キトト思ヒ己ノ奇巧ヲアラハシ人ニ誇ラレト欲スルノ具ニノ實ニ世ノ長物ナリ故ニ如是モノ一毛不載之

一圓理弧背ノ術ハ算法ノ奥妙ニメ古ヨリ積方ヲ以テ圓理トス然凡數萬角ニ至ルモ微塵ノ弧ヲニスカレス近古卓識ノモノアワテ是ヲ疑フトイヘ凡其術ヲ得入我關子工夫ノ而得之積方圓理別ナリレタトヒ巻中術ナシトイヘ凡ミツカラ其術ヲ得ルニ至ラバ其解自ラ明白ナラン

一此書過衆ヲ省キ文義ヲ約ニシ使用便ナルヲ要トスルヤ術中不解其義初學ノ徒コレヲ怪ムトナカレタトヒ巻中術ナシトイヘ凡ミツカラ其術ヲ得

精要算法卷之上

南筑 久留米藩 藤田權平定資著

羽州

新庄藩

安島萬藏直圓訂

相場割

今商人米と買賣あり 南の人よ金をあせ三斗ちく賣  
全拾七文取歩五文あり 其の人の人又索の人よをお場う  
金をあせ三斗ちく賣く全或拾みの五文ありといひ  
買並相場 美末石数何程も

言曰

買並相場全五文石五石

上中下の米より是云上東。中米ハ全之を有リ。下米  
又云右等と銀猪と曰安。重云中米下ノ米ハ全之を有リ。  
言曰。上米全之を有リ。八斗。

銀費又百匁居ノミナム米と金並玉石守銀ニ付シテ  
一斗米四石の並あり實方場何種トモ.

三面實相場三石守銀言語之

御回代銀と並並米と刻一升三石と御ノもと銀と別  
四百六十二分之二

十二と加定法二升六十二と御ノ平方ト國二十一と

以テ御定法スと減除二十石代銀と御ノ三石と御里守銀

とく

米と金の相場より麦と金の相場へ大抵取引ニシテ安ト又  
金をあす米と麦ハ武石又半安ト他金をあす銀在六石  
金をあす米と麥の種トモ

三面金玉金八斗

御回代銀と並並米と銀と刻一升六毛又安と減除と別  
四百二十二分之二

尾裏定法二升と加二毛四分と御平方ト國二升六毛と御ノ

定法二升と減除二升安と減除と御平方ト國二升六毛と御ノ

上末或石軍下末三石代金合金之御上末下末八金玉義

有三斗安ト金をあすの上末の種トモ

三面金をあす上末玉石軍

御回代銀と並並米と銀と御ノ別と並上末石軍と

下末石軍と金又石軍内別並ると減除四百六十二分之二と御ノ

御ノ右玉上末石軍と並別小玉と御ノ二百八と御ノ

右上米下石加一斗六分八厘八毫八分  
加(七百二十九)平方小圃(二十)石引右上米下石加八分  
代金先割一石引以代金先割上米  
代金先割上米六斗或升四合究竟之金先割  
上米下米相加合或称五年之上米相加何往而  
言回上米相加合或斗

併曰右代数と並て相加合を割又代金を割(二分九毛)  
六是之定法(二分)六石と藏附(四)平方小圃(二)石引  
是之定法(二分九毛)相加合を割(二分)石引

上米相加

上米倍下米倍六石代金合或拾三石或分。銀七毛六分  
金三石引上米下米六升安一又一石引上米下石引  
銀三石九毛安一石相加合何往而

言回上米金先割石引或斗。銀七毛六分

併曰代金と並安と代数と並ケ(一ヶ一石)石引以代金

倍銀半並安と銀先割ケと並ケ上米石數藏附(四)石引

別々乗す(一ヶ一石)石引以代金上米石數藏附(四)石引

下米石數と加(二十九)平方小圃別々乘すと藏附半(一十三ヶ九分)石引

右上米下石加(二百〇四ヶ一ヶ二石)平方小圃(一十四ヶ二石)石引

右上米下石加(二百〇四ヶ一ヶ二石)平方小圃(一十四ヶ二石)石引

以右より至りと加(二十八ヶニシテ)と代金を割(一石二斗)と  
上米金をその相場とし

今西より下く金を取る東北の相場(東圓)に  
就て東百石より運賃金括(五石)東圓より金を取る  
相場の相場としと為(他は運賃金率の相場とす)  
某とく度を求むる運賃不生

言曰東圓より金を取る東圓又作、南

御回運賃金を並百石を割(一分)としと有る也。先主高

田相場を割(二分)と成定法(二分)と加(五石)と並百石を

用(セ)としと有る因定法(五石)と減削(二分)と並百石をとしと  
別(一石二斗)としと有る東圓の相場とし

上米武石八斗又作代金或又三分銀亦不二斗五石ト裏  
有軍平又作代金三分銀分ト銀七斗又作が他上米より東へ  
金を取る二斗安しと金を取るの銀の相場とし

言曰金を取る銀の相場とし

御回下米代金を並と安と割(一ヶ)。先主下米石數と  
減削(四ヶ)と並る上米増減と割(二十九ヶ)と並百石を並上米  
代金を並安と割(一ヶ)。先主も並る上米石數と加(二ヶ)と並  
と並百石と東と云。先主下米増減と割(二十九ヶ)と並  
先主下米増減と割(二ヶ)と並百石を並六石と並る西と云  
東と並く下米代金と割(十二ヶ)と並百石を並

上末代金と並べて末石教と云ひ  
十二ヶニカセニモス也。先と云ふ處  
ナリトマシテ南と云。先よ上末石教と云  
又下末石教と云。又安吉と云。又安吉と云  
三ヶ六ヶ又安吉と云。一ヶ〇九ヶと云。北と  
云。西とあの方より並びけ合。四ヶ六ヶ六  
ヶ又六ヶ内也と藏海。三ヶ又二セ  
ト城平方より國々。一ヶ八ヶ又六ヶ又と加。四ヶ。と云  
刻印。と云金とあの方限お塙と云。  
只云葉六石七石八石裏武鉢。之れ六石八石  
八石九石十石。次全令檜木又  
云東麦合二石石中四石末代金九石麦伏金。黑也。之者  
全令檜木又白石の如き。

言曰全之多。自余三十一年。更復三耳。

御田口云代金と並文書石數をうけ二石  
麦石數と並文書代金をうけ九十四石  
是云麥石  
數と並文書代金をうけ六十九石  
七斗六升丙と  
加内ひと減膳半々  
瓦三十六石又丁と  
斗七升又合  
ケ一万八千六百又  
十石又斗八升又合  
丁と並方より  
少しき合内内  
減膳○六又ニス  
一石五斗  
平方より用  
一石五斗  
也と之丁と減膳  
百三十石  
又云麥石代金と並只云代金をうけ九十一  
石又合

右合數と麦二石六斗三升置て全七石。銀済と左  
宮庫貯候從來小麦合金量每石二石三斗安一石の經と

若曰全金量每石二石三斗半麥四石半銀六石候故也

術曰只云埋銀と並又云米石數とすけ一石二石八斗四石

又云埋銀と只云米石數とすけ合す數と減候一石二石一十七石  
一斗一升六合六升六升肉

又云埋銀と只云米石數とすけ合す數と減候一石二石一十七石  
一斗五升三合

肉又云埋銀と只云米石數とすけ合す數と減候二石十九石  
一斗八升七合八升

又云埋銀と只云米石數とすけ合す數と減候二石一升七石  
一斗二升八合二升

始上相場支石錢斗  
下相場支石斗

答曰

上米武百八十石錢斗

下米武百八十八石

御曰只云高米と又云高米合口と底法と云只云合  
口益人云も未だけ八十とひの只云高米合口八十と  
以又云益金と減除三十法とく割九と承東と云 呂又  
但云數をすり半度七十と承北又云益金と減除一百  
西と云代金益只云益金と又云益金と加一石とひの  
又云高米合け一千八百兩と云 但云少數の内高米合  
と減除三又云益金合け三百石是高米合口減除一石二  
と承東合け一万。二とひの北と云 西と云方と通ひ  
合一百。四と承肉少數減除三十とひの平方と通ひ六と  
承高と云。八とひの承合割二石とひの始の上米  
相場と云

案了承百枚ゆく益金と御う其の又云代銀武百之  
今又云紙四百枚ゆく益金と御う御<sub>總括</sub>其の又云代銀

御曰後云紙數と益金云紙數ゆく割と承北と云

卷之三

大至伏金之象

御内金を以て並用米相陽と減除一斗五升を左  
右端と並用内金を以て減除二升を右とし 左右互減等  
數度とひらめ等教とひらめのれと割た三升セとひら  
右とひらめ全とひらとひらとひらとひらとひら

書曰上宋之書下宋之書

銀券を取引する事は、銀行の運営に大きな影響を与える。銀行は、預金者から受け取った現金を、他の預金者に支払う際に、その現金を手元に保有する必要がある。しかし、現金を多く持つことは、リスクを高め、また、現金を運ぶ際には、強盗などの犯罪の対象となる可能性がある。そこで、銀行は、現金を減らすために、現金を電子的な形で扱う手段を開発した。この手段が、銀券である。

卷之三

上条主事の代銀八千足  
下条主事の代銀七千足

上条も外の代浪九  
下条も外の代浪七  
中条も外の代浪五

四

以下異文

御内上乗代數と下乗代數と互減等數 などあつた  
上乗末右割と上乗三と加減數とへ 下乗スと加  
数とへ 他割よせく加減 なししの代數と互加減  
上乗末右の代數とへ 加減と互加 上乗末右  
の代數と互加減とへ 加減と互加 上乗末右  
末右の代數とへ 加減と累減 とも上乗末右の代  
数とへ

今上車の緒さきより合之宿ひきに代銀合二貫八分之但上車之  
よりヤ合之ハセシ安一石之數ごうと高 但持もつひ走はして止とどり代銀だいぎんハ  
止とどりををあ

高上緒又拾五疋  
下綴之  
御内安至右之  
土數六十七  
依割御左の役  
數三十萬石  
又銀三十  
二万八千右  
御内安至右之  
數

今里の宿は只今紹代銀六千筋を貯金

多々又云甲緒主の代より緒主の代へ銀指うる安  
前ま由緒は乙緒へ全多きゆ候とて 他合之數再を之  
の代銀不をあ

甲戌年  
立之代大將軍

湖因太行數之多矣  
別言數之多矣  
依胸而九

の取扱三と云ふ者とけセ百三  
ナス 右数より海之内を  
附セ 甲緒之數とて あまねとあるとのへありふる甲緒  
之數より右數と黑ふ加くとて數とて之  
上末下末石數合はば石量を半半あり上末伏人全持  
代金持力多右全持半有り程也化吉あ陽年位止  
不そも

高僧傳記卷之二  
唐宋元明五代  
十卷

左の枚数九枚の右枚とくに  
スナ。とみ右枚よゆきを

相陽子

上來下來不教合招又在三牛市中全見也。自上來去者不識中  
之牛。牛來人去者三牛。又不識金何往焉。他亦下不  
識中之牛。

故曰上乘相陽上中乘互陽上互感等數二三者合數

劉一  
右軍  
下東方陽之至等教之以刻石  
右軍

依利而爾方假數一十ある甲とくスは六百右數を減へ  
去る假數と加え上東代金とく

上東中東下東合武括右單年上東代金合武括左单年合  
上東ハ八半中東ハ九年二年下東ハ五石三年中東合  
の假數但あト不

の假數但あト不

言曰上東代金又安中東代金七百下東代金九百

微回合代金と益下東お傷ハニ百二十肉熟石數と減解ハニ真

甲とく上東お傷ハニ下東お傷と減解ハニたれ 中東お傷

去る下東お傷と減解ハニ右とく 依利而爾方假數とく

甲とくセナ右數小油ハニ去く解ハニ上東代金とく

今假り金あり甚ると益人只云金を益九半年的の金と  
買さんとすとへに生五年假ハニと増解ハニ中東より又云  
金を益すと益人只云金を益九半年的の金とすとへに生五年假ハニ

言曰假金而假之

御曰只云增解ハニ益又云益の金とくハナ百四十肉又云增解ハニ  
只云益の金とくハニ益すと益解ハニ一百甲とく 只云  
信入を益又云益の金とくハニ四十九甲 乙とく 又云信入を益  
とくハニ益云益の金とくハニ六十而とく 乙とく 乙と互減等數ハニ  
とくハニ 甲乙丙右等數とく割定甲ハニ一百一定乙ハニ

定丙三百六十一とひる 定丙三石六とひる 依附一石二石と  
ひる 実甲三石六とひる 右數三石六とひる 之附二石三と云傳又  
云只云 碓束三石六一万石四十八と云只云只云 あの東三石六と云家一百五

於金三石六

米子石三石六代金子九百三石六代金子三石六の多くの割合  
かく右數三石六代金不三石六有右數三石六と為

く 言曰米武百八宿三石六 代金三石六八

御曰代金三石六 依附一ヶ九とひる 依零一ヶ九とひる 依零一ヶ九とひる  
御右二石六とひる 右三石六代金三石六とひる 依零一ヶ九とひる 依零一ヶ九とひる

東三宿三石六代金武安三石六方附三石六今年年三石六の東實  
あり代金三石六傳數三石六不三石六有右數三石六と為

言曰代金七三石六 末武經傳

御曰代金

二石八文 依附二石八文

御曰代金

二石八文 依附二石八文

加二十八文 多極數三石六とひる

多極數三石六とひる

多極數三石六とひる

米石數三石六刻多極數三分之二三分之二座。一年に忽附三石六とひる 依  
零三石六御三石六とひる 依零三石六とひる 依零三石六とひる

右數三石六とひる 依零三石六とひる 依零三石六とひる

上東下米合三石六代金合三石六上東下米合  
金三石六相場合三石六斗三石六相場及三石六代金三石六

高三石六代金三石六とひる

上末相場 三石

代金 指六文

下末相場 三石 代金 指八文

又

上末相場 三石 代金 指四文  
下末相場 三石 代金 指四文

例曰上末下末相場合數と並半て一石 例の並半代  
金 三石 四石二斗 と取是と並半數と減除半條自約術  
右先數而左余是等 代金減數を並半たる數奇數と偶  
數を並半して左數偶数と偶数と用ひりあり  
列並數の内より右數と減除上末金を左の相場とし  
代金を並用左數と減二度刻上末代金とし 領了

例曰下末相場及下末代金を並じ 並半の内より右の上末相場  
代金を並用左數と減二度刻上末代金とし 領了

今残り金を左の相場を以て減とし右の相場と用ひ  
同と不引と云ふ文と上九分六厘を並べ  
其後更に引と用ひて引と云ひ 也減と金とすり付或百  
石と減と金と貴四百石を以て又残相場のと同とし其後  
ハ目と右金とがまと試百石をあと移す更八百石を減之  
以て終よ玉数とめぐらしく止むと云々續相場并せ  
續相場と云

例曰相場四貫又百石を減すよ  
也減手武三百石を費又百石を減すよ

又

又 残り銀又費六百九拾五文

也餘手又百三拾八文。四拾七文

御回後の端残の内初の端残を減三百四十三列並 後の全數の内初の全數を減除一十たゞれ 百文を並内

九拾六文と減除四是より後の全數を減一百一十五列並

九拾一御手の原數六百一と並並列並二十一萬。と

右數ゆきへ去る時七十原數とし 又貰文

も傷もどすと並内原數と減除四十九百右數と並列二十八

以上總一文四十九百右數と並列六十七と並

殘相場とし 是より右數を加九十一原數相場とし

右數を加減して重ね算する之

とも通用の傷もどす不令故よ不需

米出

出

米代金百

財

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

但

米

相場

金

を

あ

る

三

石

七

千

九

百

出

財

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

出

言曰

代金百九拾六文銀拾五文

米子武百五拾三石七斗九升九合

御回場銀を並銀取引と定め

其取引を並銀と定め

御回場銀を並銀取引と定め

其取引を並銀と定め

減條 三石 入斗 三石 列上益

米相場 三石 入斗

常十石

右上益 依割而列左の照粒七十石

常十石

九十石 入斗 依割而列左の照粒七十石

常十石

百石 入斗 依割而列左の照粒七十石

初賣米或百七石或斗三石代金或百石或斗米或百石  
中賣米三百八石或斗三石代金或百石或斗米或百石  
末賣米四百石或斗三石代金或百石或斗米或百石  
初賣不次賣上金或百石或斗米或百石或斗銀或百石或斗  
賣相場并銀或場及懷八何經為

言曰初賣相場金或百石或斗三石

銀或百石或斗

名儀入三斗七升

術曰立天元一爲初相場

內減次第高爲中相

場 場乘初代金內減初端米餘

列初相

乘中代金內減中端米餘

列中相場

未代金內減末端米餘

列末相場

端銀○

名房列中相場乘中端銀

列末相場

名尾乘

乘末端銀

名尾乘

氏心相乘數餘乘初俵數得

角尾相乘

數餘乘

寄左列房乘亢

中俵數

內減角心相乘

加箕得

數餘乘末俵數

與寄左

平方開之得初相場石推前術

相消得

得各合問

開方式

只云未指俵三斗大豆或拾三俵八斗代金合指又云米拾  
或俵三斗六斗大烹指九俵或升代金合指又云别云未大  
烹八斗金合指三斗安一烹云未大烹云米指之三斗又  
作豆烹名相陽之指也

舊曰金合指三斗八斗大豆或拾三斗

術曰立天元一爲未相場○——加別云數爲大豆相

場

——

乘只

云米

俵數

加米

相場

與又

云大

豆

數相乘

數得

名東

列又

云米

俵數

乘重

云數

加入

又云大

豆升數

共得

數乘冬得

名冬

乘東

名江

列又

云米

俵數

乘重

云數

得數

加只

云大

豆升數

共得數乘冬得

名支

列又

米乘

只云米升

米相場得數

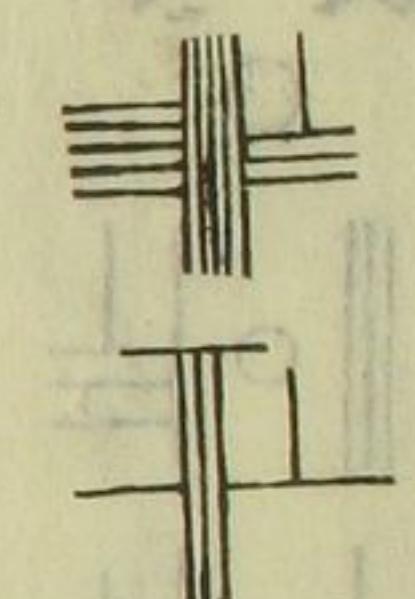
數以減

又云米升數與

東相乘數餘乘

以減

大豆相場得數



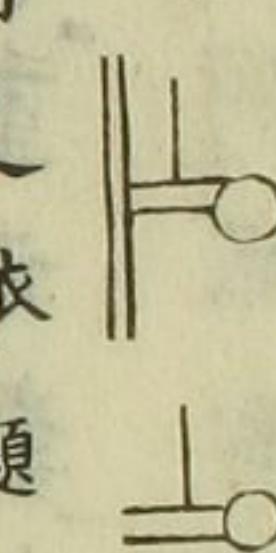
支餘

寄左  
列只云

代金乘冬內減又云代金與東相乘數餘

乘米相

場及大豆相場得



與寄左相消得式

實級空縮之

依題云數有無空級

得歸除式

只云東武石四斗大豆四石代金七石又云東四石小豆六石代金指數別云東代金七石大豆代金又云少豆代金云東三石石數合指六石右金三石可何往焉

言曰金乘數守東八斗大豆三石當三石八斗

術曰立天元一爲米相場

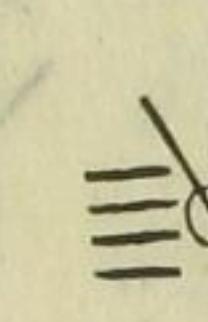
——乘只云代金內減只

云米石數餘



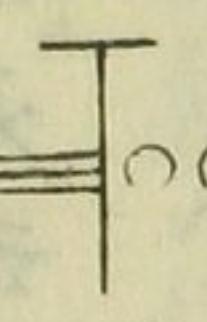
名東列又云代金乘米相場內

減又云米石數餘



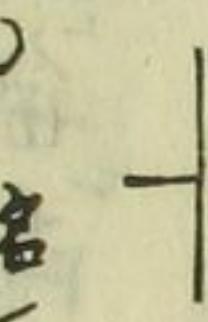
名冬列別云米代金乘米

相場以減別云石



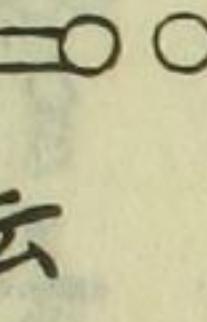
寄左列冬乘

數餘乘東及冬得



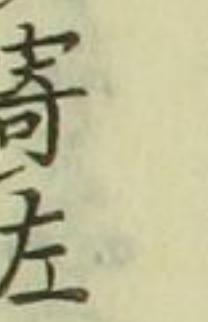
別云大豆代金

及只云大



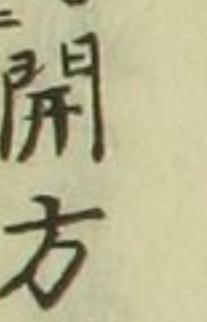
名江列東乘別云小豆代金及又

豆石數得

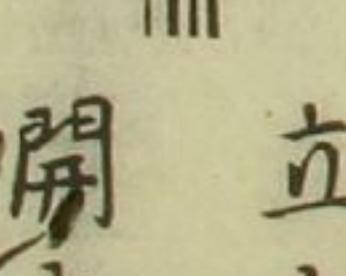
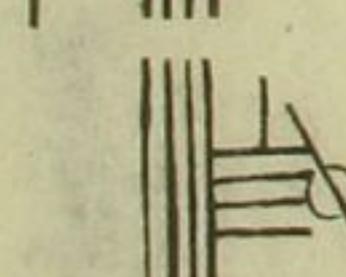
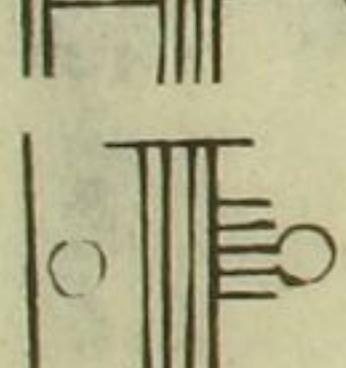
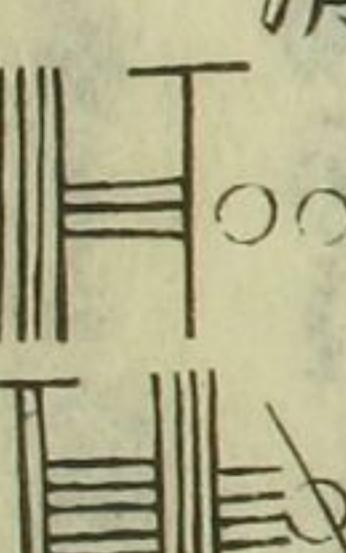


云小豆石數加江共得數乘米相

場



得開方式

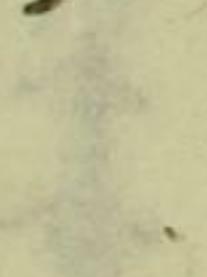
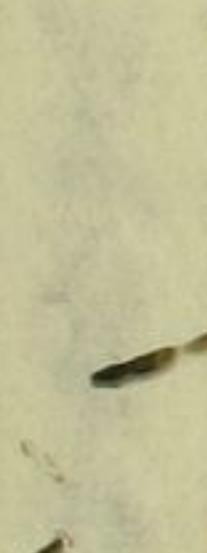


立方

得末相場



合問



開之

上米三石四斗中米或石七斗下米四石八斗伏食金五斗云  
上米八斗中米八斗金三石可或斗安一又云中米八斗下米八  
斗三斗安一合金三石的五斗加何往而

益回金三石与上米七斗中米九斗下米三石或斗

術曰立天元一爲每两上米。——加只云數爲每兩  
中米。——加又云數爲每兩下米。——乘代  
金內減下石數餘。——乘每两上米及每两中米  
得。——寄左。列每两中米乘上石數加  
入每两上米與中石數相乘數共得數乘每两下米得  
與寄左相消得開方式。

——立方開之得每两上米七合問

米三石三斗大豆四石八斗小豆四石六斗麦稻谷代食金五斗  
只云金三石八斗米八斗大豆八斗年安一又云大豆八斗小豆八斗年安  
斗安一重云小豆八斗麦八斗年安一合金三石的五斗加何往而

益回金三石

小豆或石年安一麦三石

術曰立天元一爲每两米。——加只云數爲每两大  
豆。——加又云數爲每两小豆。——加重云

數爲每两麦。——列每两小豆乘每两米。

名甲列每两大豆乘每两麦。——加重云

乘甲及

代金得

寄左  
列乙乘每

名丙列甲乘每兩

名

兩小豆及米石數

麥及大豆石數得

名

列乙乘每兩未

名戊列甲乘每兩大

及小豆石數得

豆及麥石數得數併

入丙丁

與寄左相消

戊共得上

得開方式

三乘方開之得每兩未一

石合問

精要算法卷之上終

安東氏

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The paper appears brittle and stained, with darker, reddish-brown spots and streaks of water damage along its right edge. The overall texture is mottled and uneven.

安東文